

フレデリック・ダグラス著

『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第十九章*

堀 智 弘

第十九章 逃亡計画

新年の考えと思索く再びフリーランドに買われるく奴隷であることに功名心はないく親切は奴隷制の埋め合わせとはならないく逃亡への最初の数歩くそれに至るまでに考えたことく奴隷制への和らぎる反感く心からの誓いを立てるく奴隷たちに計画を明かすく『アメリカの雄弁家』く奴隷制擁護の説教にかかわらず計画は賛同を得るく発覚の危険く奴隷所有者の奴隷の心を読む能力く疑念と強要く二重の意味の聖歌くわたしたち一団のドルでの価値く事前の相談く合言葉く希望と恐怖の葛藤く乗り越えなければならぬ困難く地理についての無知く想像上の困難の概観くわたしたちの心理への影響くパトリック・ヘンリーくサンデイが予知夢者

* 本稿はJSPS 科研費 JP21K00384 による研究成果の一部である。

となるく北部への逃亡経路の立案く反対意見の考慮く自由を得た者への罨く外出許可証が書き上げられるくその時が近づくにつれの不安く失敗の恐れく仲間たちへの訴えかけく奇妙な予感く偶然く裏切りが露見するくわたしたちを逮捕する際のやり方くヘンリー・ハリスの抵抗くその効果くフリーランド夫人ならではの話しく牢獄へのわたしたちの悲痛な行進く道中での群衆の容赦ない嘲りく外出許可証を飲み込むく否定くサンデイへの愛はあまりに強く疑念を許さないく馬の後ろに引つ張っていかれるく牢に入つて安堵するく苦しめる者たちの新たな一団く奴隷商人たちくジョンとチャールズとヘンリーが解放されるく作者、牢獄にひとり取り残されるく牢獄から出され、ボルチモアへ送られる

わたしは今一八三六年の開始時、深い思索に適した時にいる。心はおのずと人生のすべての位相——理想的、現実的、実際のな

位相——における数々の謎に思いをめぐらす。考え深い人々は年の開始時には両側に目を向け、過去の過ちを吟味し、将来犯すかもしれない過ちに備えるのだ。わたしもそのように考えに耽っていた。回顧することにほとんど喜びはなく、展望はあまり芳しくなかった。「自由のためにこれまでわたしが行ってきた多くの決心と祈りにもかかわらず」とわたしは考えた、「一八三六年のこの最初の日に、わたしはまだ奴隷で、精神を食らい尽くす隷属状態の深みのなかをまださまよっている。わたしの身体と魂の才能と能力は自分自身のものではなく、わたしを所有し支配することを強いる物理的な力をもっていることを除いては、どのような意味でもわたしより優れているわけではない同輩たる人間の所有物である。共同体の団結した物理的な力によって、わたしは彼の奴隷——生涯の奴隷である」。こうしたことを考えると、わたしは混乱しいらだった。それはわたしを憂鬱で不満にさせた。わたしの心の苦悩を書き記すことはできないだろう。

一八三五年の終わりに、わたしの一時的な主人であるフリーランド氏は、トマス・オールド船長からわたしを一八三六年の期間分購入していた。価値のある奴隷だという評判を得たいという功名心もしわたしにあったのであれば、彼がわたしの働きを確保するために素早く動いてくれたことは、わたしの虚栄心をくすぐっていたであろう。実際はそうではなかったとはいえ、わたしはこの状況に多少の満悦を感じた。わたしが主人としての彼に満足しているのと同じくらい、彼がわたしに満足していることを表していたからだ。わたしがフリーランド氏に対して抱いていた敬意はすでに示唆したが、ここで、フリーランド氏は多くの素晴ら

しい資質をもった人物であり、わたしのどの主人よりも、わたしにとつてずっと好ましかったと、北部の読者——そこでは奴隷所有者を称賛する自己中心的な動機が働くことがない——に向けて述べても構わないだろう。

しかし、奴隷所有者の親切は奴隷制の鎖の表面を飾るだけで、その重みや力を少しも減少させることはない。人間は奴隷制以外のもっと良いことのために作られているという考えは、親切な主人の温厚な扱いのもとで最も旺盛となる。だが、奴隷制の険しい容貌は、部分的に啓蒙された奴隷に自身の隷属を忘れさせたり、自由の望ましさを忘れさせたりする笑顔を浮かべることができないのだ。

親切で紳士的なフリーランド氏のところでの二年目、その最初の月が終わるまえには、わたしがほんの子供であったときに、人類の全員の自然な生まれつきの権利であることを突きとめたあの自由を獲得するための計画を真剣に考え編み出そうとしていた。この自由への欲求は、コヴィイの情け容赦ない支配下にいるあいだは鈍らされていた。一八三五年のあいだ、フリーランド氏のところでは、友人たちとの真に愉快な日曜学校の用事があったため、それは延期されて休業状態となっていた。だがそれは、決して完全にしずまったわけではなかった。わたしは常に奴隷制を憎んでおり、自由への欲求がいつでも扇ぎたてられて燃えさかる炎となるためには、好都合な風さえあれば十分だったのだ。現在、と過去に生きる者でしかないという考えはわたしを苦しめ、わたしは未来——希望のある未来——をもちたいと望んだ。過去と現在に完全に閉じ込められているということは、人間の精神にとって

忌むべきことである。それは魂に対して——その生命と幸福は止むことない前進である魂に対して、牢獄が身体に対するのと同じような関係、つまり立ち枯れと白カビをもたらす疫病、恐怖の巢窟である。もう一年これが始まるということで、わたしは一時的なまどろみから覚醒させられ、わたしの休眠していたが長らく抱かれていた自由への渴望は息を吹き返した。わたしは奴隷制に満足することを恥じただけでなく、満足しているようにみえることを恥じたのであり、自身の運命のうちでできるかぎり善処するという考えをすべて打ち捨て、隷属の家から出るようにわたしを導くような考えだけを受け入れたと真実を述べるとき、F氏の温厚な支配のもとでの現在の都合な状況において、わたしが過度に野心的で、身の丈に合った謙虚さを相当に欠いていると、親切な読者のなかには非難する方もいないとは確信できない。現在の都合な境遇によって活気づいて、このとき痛感していた自由になり、たいという激しい欲求ゆえに、わたしは考えることや声に出すことだけでなく、行動することを決意するに至った。したがって、一八三六年の開始時に、自由を得るための真剣な試みを自分で行うことなしに、いま始まった年を終えるようなことはほしきないとわたしは心から誓った。この誓いはわたしに個人として逃亡する義務を課すだけであったが、フリーランド氏のところまで過ごした一年間で、わたしは我が兄弟同然の奴隷たちに対して「鋼の留め金」によるかのような愛着を感じるようになっていた。わたし

1 シェイクスピア『ハムレット』一幕三場のポローニアスの台詞に基づくが、『ハムレット』では「鋼の留め金(hooks of steel)」ではなく、「鋼の輪(hoops of steel)」となつてゐる。

したちのあいだには最も愛情と信頼にあふれた友情が存在していたので、わたしの計画と目的を率直に彼らに打ち明けることで、わたしの高潔な決意に加わる機会を彼らに与えることが義務であると感じたのだ。ヘンリーとジョン・ハリスに対しては、人が別の人と感じうる最大限に強い友情を感じていた。彼らとともに、そして彼らのために死ぬことも厭わなかったのだ。したがって、彼らに対しては、相応の用心はしながらも、わたしの気持ちと計画を打ち明けるようになっており、そうしながら、良い機会さえあれば逃亡するという話題について打診した。わたしが親愛なる友人たちの心にわたし自身の見方と感情を鼓吹するべく、まさに最大限の努力をしたことを読者に述べる必要はほとんどない。いま完全に目覚め、わたしにはつきりと誓いを立てた友人たちとの会話のなかで、わたしのわずかな読書で人間の権利に少しでも関連するものはすべて活用された。あの(わたしにとって)宝石のような本、『アメリカの雄弁家』は、抑圧と奴隷制を非難する——自由の計り知れない恩恵を得るために人々がどんなことに挑み、どんなことをなし、どんな苦難を受けてきたのかを伝える——その雄弁な演説と刺激的な対話によって、わたしの記憶にまだ鮮明に残っており、よく訓練された兵士が教練を受ける際の機敏さで、わたしの話の隊列に踊り入ってきた。実のところ、わたしが演説を始めたのはこのときであった。わたしはヘンリーとジョンとともに奴隷制という問題を精査し、それが毎時違反する神の永遠なる正義の糾弾する焼き印にそれを押し当てた。我が仲間たる従僕たちは無関心でも、鈍重でも、無能力でもなかった。わたしたちが似通っていたのは意見よりも感情においてであつ

た。しかし、実現可能な計画が提案されるようなことがあれば、だれもが行動する心構えができていた。「どうやって、これをやったらいいのか示してくれ」と彼らは言った、「そうしたら、他はすべて了解だ」。

サンディを除いて他の者は全員、奴隷所有制度の聖職者の影響力から完全に逃れていた。主人への服従の義務をセント・マイケルズの説教壇から教え込まれたことは無駄であった。神を我々の奴隷状態の創始者だと認識すること、逃亡を神と人間双方に対する罪だとみなすこと、我々の奴隷状態を慈悲深く有益な取り決めだと思ふこと、我々がアフリカで連れ去られた場所に比べればこの国での我々の状況は天国だと尊重すること、我々の固い手と黒い色は神の不興のしるしであり、我々を奴隷制によって当然支配されるべき従僕だと指し示していると考えること、主人と奴隷の関係は相互の利益の関係だということ、我々の仕事が主人のために役立つというよりも、主人の考えが我々のために役立つということ。セント・マイケルズの説教壇がこうしたもつともらしい教義を教え込んだのは無駄だったと言おう。自然はこうした教義を一笑に付したのだ。わたし自身も、わたしを縛りつけてきた鎖には完全に大きくなりすぎてしまっていた。神のご意志ではわたしが何になるべきか、そして何になるかもしれないかについてのローソン師の厳肅なことは、わたしの魂に響かずに消え去ることとはなかった。わたしは急速に大人になりつつあり、子供時代の予言はいまだ実現されていなかった。年は過ぎ去っていくのに、逃亡への至上の決意は実を結ばずに色褪せてしまっているという思い——自分はまだ奴隷、しかも、自由を得られる可能性が狭ま

り、いまなお狭まりつつある奴隷だという思いは、それを抱えて安眠をむさぼれるようなことではなく、わたしがそれを抱えて安眠をむさぼることもなかった。

しかしここで新たな問題が発生した。わたしが当時抱いていたほどに刺激的な考えや目的は、注視する非友好的な観察者にそれらが露わになるといふ危険を伴わずに、長らく心を掻き乱すことはできなかった。わたしの肌黒い顔は、危険な企てを安全に隠すにはあまりに率直すぎるものが判明するのではないかと危惧する理由がわたしにはあった。もつと重大な計画でも石の壁から漏れ出し、その企画者が明らかになることがこれまでであった。しかし、今回はわたしの目的を隠す石の壁がなかった。わたしの隠しごとのできないお粗末な顔は、わたしが会う人々の日常の詮索する眼差しにとても耐えられるものではなかったので、わたしはそれをインディアンの無表情な顔つきと喜んで交換したいくらいだった。

実利的な結果を得るために人間本性を研究することは奴隷所有者の関心と仕事であり、彼らの多くは奴隷の考えと感情を見分けるのに驚くほど長けていた。彼らは土地や木や石ではなくて、人間を扱わなくてはならず、自らの安全と繁栄に対して有しているあらゆる関心のために、彼らの仕事の対象である素材を知ろうと研鑽しなければならなかった。奴隷所有者が自分のまわりへ向けるほどの多量の知力は観察を必要とする。彼らの安全はその警戒心にかかっている。彼らは自分たちが毎時犯している不正と悪行を意識し、もし自分がそのような悪行の犠牲者となったら自身はどうするかということを知っている。正義の恐ろしい応報

の最初の兆候を見逃すまいと目を凝らしているのだ。したがって、彼らは熟練を重ねた眼差しで観察し、奴隷の肌黒い顔の向こうにある心と胸の内の状態を相当な正確さで読み取れるようになる。

これらの不安な罪人たちは、奴隷に関するところでは素早く問題を探り出す。いつもと違う謹厳さ、明らかな放心状態や不機嫌や無関心は——実のところ、平素とは違うどんな様子だろうと——嫌疑と追及の理由を与える。しばしば自らの優勢な地位と見識をよりどころとしつつ、自らの告発が真実だとわかっているふりをする²ことで、彼らは奴隷を責め苦しめて白状させるのだ。「お前には悪魔が取り憑いているから、鞭打つてそいつを追い出してやろう」と彼らは言う。こうして、わたしはしばしばほんのわずかな嫌疑だけで責め苦の目にあつた。こうしたやり方には利点だけでなく、不都合な面もあつた。奴隷は鞭打たれて、犯してもいない罪をときに告白することがある。古き良き原則——「何人も有罪が証明されるまでは無罪とされるべき」——は奴隷農園では適用されない³。嫌疑と責め苦はここでは真実を得るための是認された方法である。したがって、敵に付け込まれないように、わたしは立ち振る舞いに気を付けることが必要であつた。

だが、わたしたちの警戒と意識的な抑制にもかかわらず、わたしたちが万事異常なしではないとフリーランド氏が疑わないとは確信できなかつた。逃亡計画がわたしたちのあいだで発案され議論されて以降、彼がわたしたちのことをより仔細に観察している

2 いわゆる「推定無罪の原則」の起源は古代ローマ法、ユダヤ法、イスラム法にまで遡ることができ、十八世紀までには近代法の大原則となつてきた。

ように確かにみえた。人は、他の人がその人を見るように自身自身を見ることはめつたにないのであつて、わたしたちからすると、計画された逃亡に関係するすべてのことは隠されているように思えても、フリーランド氏は奴隷所有者特有の洞察によって、奴隷制でのわたしたちの平穩をかき乱している甚大な考えを熟知しているかもしれない。

いま振りかえつてみて、わたしたちは用心深かつたとはいえず、嫌疑を呼び起こすのもごく当然の多くの愚かなことをやつていたとわかるので、そのため彼はわたしたちを疑つていたとむしろ考へている。ときにわたしたちは非常に陽気で、あたかも自由と安全の場所に到着したのとほぼ同然に勝利に酔つた様子で、聖歌を歌い、喜悅して絶叫していた。明敏な観察者であれば、わたしたちがこう繰り返して歌っている様子に、天国に行きたいという希望以上のなにかを感じとつたかもしれない。

「おー、カナン、うるわしのカナン、
我はカナンの地に向かう」³

わたしたちが到達するつもりだったのは北部である——そして北部がわたしたちのカナンであつた。

「彼らがこう言うのを聞いたと思つた、
行く手にライオンたちがいると、

3 聖歌「うるわしのカナン (Sweet Canaan)」からの引用。

ここにはもう長くいるつもりはない。
 イエスのもとへ走れ——危険を逃れろ——
 ここにはもう長くいるつもりはない」⁴

というのがお気に入りの歌であり、そこには二重の意味が込められていた。ある人たちが口ずさめば、それは精霊の世界への迅速な召喚の期待を意味していた。しかし、わたしたちの仲間が口ずさめば、それは単に自由州への迅速な旅立ちと奴隷制のあらゆる悪と危険からの救済を意味していた。

わたしの計画(奴隷所有者が邪悪と呼ぶもの)には、五人の若者たちを仲間として加えるのに成功していた。彼らは近隣のえり抜き中のえり抜きであり、地元の市場で売りに出されればそれぞれ一千ドルの価値があったであろう。ニューオリンズであれば、一人につき千五百ドル、もしくはそれ以上をもたらしただであろう⁵。われらの仲間の名前は次のとおりであった。ヘンリー・ハリス、ヘンリーの兄弟であるジョン・ハリス、根つこの思い出のサンデイ・ジェンキンス、チャールズ・ロバーツ、そしてヘンリー・ベイリー。わたしはこの一団のなかで一人を除いて最年少であった。しかし、経験と文字の知識の点で全員に優っていた。このこ

4 霊歌「イエスのもとへ走れ(Run to Jesus)」からの引用。
 5 奴隷制の時代を通じて奴隷の値段は概ね四百ドル程度が平均であったが、年ごとに大きく変動した。Prestonによれば、当時、チェサピーク湾東岸では若い奴隷は希少で値段が劇的に上がり、千ドル以上の値が付くこともあったという。また、大西洋岸の土地の痩せた「旧南部」よりも、ミシシッピ川下流域の肥沃で棉花生産が盛んな「新南部」の方が奴隷の値段が高い傾向があった。

とは彼らへの大きな影響力をわたしに与えた。おそらく彼らの中のどれひとりとして、それぞれ自分だけであつたら、逃亡が可能なことだとは夢にも思わなかつたであろう。彼らのうちのどれひとりとして、この件では自らその気になったわけではなかつた。彼らはみな自由になりたいと思つていたが、わたしが彼らはこの企てに加えるまでに、逃亡するという真剣な考えは彼らの心には思い浮かばなかつたのだ。彼らはみな——奴隷としては——それなりの生活をしていて、いつか主人が解放してくれるといつかすかな希望を抱いていた。もしセント・マイケルズ近隣の奴隷たちと奴隷所有者たちの平穩を乱す咎がある者がいるとしたら、それはわたしである。わたしは重大犯罪(奴隷所有者がそうみならずように)の煽動者であると主張しよう。そしてわたしは、そのなかでもはや生きられなくなるまでは、そのなかで生きながらえたのだ。

われらがエジプトからの計画された旅立ちのときまで、わたしたちはしばしば夜間と毎日曜に会つていた。こうした会合でわたしたちはこの件について相談し、抱いている希望や恐怖について、それに判明した困難や想像される困難について話し合つた。そして良識ある人間らしく、自分たちが身を投げ入れようとしている企ての代価を計算した。

こうした会合は、小規模ではあるが、原初の状態の革命共謀者たちに似ていたに違いない。わたしたちは(いわゆる)正当な支

6 旧約聖書「出エジプト記」で述べられているイスラエル人のエジプトからの脱出を指す。

配者たちに対して謀っていたが、このような違いがあった——わたしたちが求めていたのは自身の福利であつて、敵に危害を加えることではなかつた。わたしたちは彼らの支配を覆すのではなく、彼らから逃れることを求めていたのだ。フリーランド氏について言えば、わたしたちはみな彼のが好きであり、自由民としてであれば、喜んで彼のところにとどまつたであろう。自由がわたしたちの目的だったのであり、どんな困難があろうと——わたしたちを隷属させる者たちの命と引きかえにだらうと——自分たちには自由の権利があると考えようになつていたので。

わたしたちには、自分たちにとって重要なことを表すいくつかの言葉があつた。それはわたしたちには理解できるが、仮に部外者がはつきり耳にしたとしても、確かな意味はなんら伝達することのない言葉であつた。こゝうした合言葉、を明らかにしないのは、読者も容易に推察するであろう理由がある。わたしは秘密を嫌つていたが、奴隷制が強く自由が弱い場所では、後者は隠れるか、さもなければ破滅するしかないのだ。

展望は必ずしも明るいものではなかつた。ときにわたしたちはこの企てをあきらめて、絞首台のもとにある人でさえ逃亡の希望がすべて消え去つたときに感じるような、あの心の相対的な平和に戻らうという気にはほとんどなることもあつた。平穩な隷属は、わたしたちをいまやひどく当惑させ混乱させていた疑念や恐怖や不確かさよりもまじに感じられた。

広く人類の弱さがわたしたちの小さな一団に表れていた。わたしたちはあるときには自信があり大胆で決然としていたが、次には懐疑的で臆病でためらつており、墓場にやつてきた少年のよう

に、臆病風を追い払うために口笛を吹くのであつた。

地図を眺めて、メリーランド州東岸とデラウェアやペンシルベニアとの近さを見れば、計画された逃亡を困難な企てだと考えるのは読者にはばかげてると思われるかもしれない。しかし、だれかが言つたように、理解するためには、そこに身を置かなくてはならない。本当の距離は十分に大きかつたが、想像上の距離はわたしたちの無知からすると、さらに大きかつた。すべての奴隷所有者は所有する奴隷に、奴隷制の領土の果てしなさと自身のほぼ無制限の力を印象づけようとする。わたしたちはみな、この国の地理について漠然とぼんやりとした考えしかもつていなかったのだ。

だが、距離は主な困難ではなかつた。奴隷州の境界線と自由州の境界が近ければ近いほど、危険は大きかつた。雇われの人さらいがそうした境界にたむろしていた。なので、単に自由州に着けば自由になれるわけではないということ、どこであろうと捕まれば奴隷制に戻されるかもしれないということをわたしたちはわかつていた。海のこちら側では、わたしたちが自由になりうるような場所は見出せなかつた。アメリカの奴隷たちにとって真のカナンの地であるカナダのことを、単に冬の終わりに雁と白鳥が夏の暑さを逃れるために飛んでいく国というだけでなく、人間の安息地だとは聞いたことがなかつた。わたしは神学については多少は知っていたが、地理についてはなにも知らなかつた。実のところ、この当時はニューヨーク州やマサチューセッツ州があることも知らなかつたのだ。ペンシルベニア、デラウェア、ニュージャーシーやすべての南部州のことは聞いたことがあつたが、自

由州についてはほとんど無知であった。ニューヨーク市がわたしたちにとつての北の境界であり、そこに行つて、捕えられて奴隷制に連れ戻される可能性に——以前の扱ひよりも十倍も悪い扱いを受けることの確実性に——いつまでも悩まされるのは、とても魅力的とはいいがたい展望であり、そのため、この企てに加担することを躊躇してしまふのはもつともであった。わたしたちの興奮した視点からすると、事態はときにこうであった。通り過ぎるあらゆる門には門衛が、あらゆる連絡船には見張りが、あらゆる橋には歩哨が、あらゆる森には見まわりや奴隷狩りが見えたのだ。わたしたちはあらゆる方向から囲い込まれていた。求めるべき善と避けるべき悪が天秤にかけられ、お互いに対して計量された。一方には奴隷制が厳然たる現実として立っていた。その汚れた裾に何百万人の血糊がついていて——これは見るに恐ろしい——ぞつとさせる眼差しでわたしたちを睨みつけ、貪欲にわたしたちのなけなしの稼ぎをむさぼり、わたしたちの肉を食いあさる現実として立っていた。他方で、はるか遠く、すべての形が影にしかみえないような霞がかつた遠方、北極星のまばたく光の下には——岩山や雪を冠した山岳の後ろに——不確かな自由が半分凍りついた状態で立っていて、その氷で覆われた場所へとわたしたちを誘っていた。これが求めるべき善であった。その不釣り合いは、確かさとは不確かさのあいだの不釣り合いと同じくらい大きかった。このことはそれ自体でわたしたちをひるませるのに十分であったが、未踏の道を精査し、数多くの起こりうる困難を推測すると、わたしたちは愕然とし、すでに述べたように、ときにこの苦闘を完全に放棄しそうなほどであった。

このような状況で、奴隷の無教養な心にひらめく困難の影像がどんなものか、読者はほとんど理解できない。どちらの側を向いても、情け容赦ない死がさまざまな恐ろしい姿をとっているのが見えるのだ。あるときは、それは、友人のいない見知らぬ土地で、わたしたちに自分自身の肉を食べるようにさせる飢餓であった。あるときは、わたしたちは波と格闘し（わたしたちの旅路は部分的に海路であった）、溺れてしまうのだ。あるときは、犬に追われて追いつかれ、その容赦ない牙によって粉々にされてしまった。サソリに刺され——野獣に追いかかけられ——へびに噛まれてしまった。そして最悪なのは、川を泳ぎきるのに成功し——野獣に對峙し——森で眠り——飢えと寒さと暑さと裸同然の状態に苦しんだあとに、雇われた人さらいたちに追いつかれて、彼らが法の名の下に、そのひどく呪われた報酬のために、もしかするとわたしたちに発砲し——ある者を殺し、別の者を負傷させ、全員を捕えることを想像したのだ。無知と恐怖によって描かれたこの暗い絵図は、ときにわたしたちの決意をひどく揺るがし、

「見知らぬ労苦に飛びこむよりは

いまの労苦を耐え忍ばん」⁷

という気持ちになることもまれではなかった。

7 シェイクスピア『ハムレット』三幕一場のハムレットの独白からの引（ただし、語りの時制に合わせて、動詞が過去形に変更されている）。

わたしの経験したこうした状況を大げさに書きたくはないのだが、読者には、わたしがそうしたがつているようにみえるだろうと思う。逃亡するということについてためらっているときに奴隷が感じる極度の苦悶を説明できる者はいない。彼がもっているものすべてが賭けられており、彼がもっていないものでさえも賭けられているのだ。彼がもっている生命が失われるかもしれず、彼が求める自由は得られないかもしれないのだ。

パトリック・ヘンリーは、彼の魔力的な雄弁によって気持ち昂らされて、勇猛果敢に躍動する彼と命運を共にしようという気になって傾聴している代議員たちに向けて、「われに自由を与えよ、しからずんば死を」と言うことができた。この言葉は自由民にとってさえも崇高なものであったが、同じ考えが鞭と鎖に慣れた人間——隷属によってその感性が多かれ少なかれ鈍らされてしまったに違いない人間——によって実質的に主張されるときには、比較できないくらいはるかに崇高である。わたしたちの場合には、追い求めていたのはせいぜい不確かな自由であつて、もし失敗すれば、米作湿地やサトウキビ畑でのゆつくりとした死が確実であつた。命は正気の間人によって軽く受け取られることはない。それは貧民にとつても、君主にとつても——奴隷にとつても、主人にとつても——等しく貴重であるが、わたしたちのうちで、希望のない隷属状態のまま人生を過ごすよりも、撃ち殺され

8 アメリカ建国の父のひとりであるパトリック・ヘンリー（一七三六—一九九年）は、一七七五年三月二十三日のバージニア植民地代表者会議において、大英帝国との戦争を覚悟するように訴える演説を行った際に、演説をこの有名な言葉で締めくくつたとされる。

ることを好まない者はひとりとしていなかったと信じる。

準備が進むにつれて、根っこをくれた人物であるサンディが不安にかられるようになった。彼は夢を見るようになっていて、そうした夢のなかには非常に苦悶させるものもあつた。ある金曜日の夜に見た夢は彼にとつてたいへん重要で、わたし自身もそれによつていくらか気分が滅入つてしまつたと白状することはまったくやぶさかでない。「昨晩、奇妙な物音で眠りから覚める夢を見た」と彼は言った。「通り過ぎるときに轟音を起す怒つた鳥の群れの鳴き声みたいで、木のてっぺんから吹いてくる突風みたいに、耳に降りかかつてきたんだ。それがどういふことなのか見上げたら、おまえさんが見えたんだ、フレデリック、あらゆる色と大きさのたくさん鳥の鳥に囲まれた一羽の巨大な鳥の鉤爪につかまれたおまえさんが。やつらはどれもおまえさんをついばんでいて、おまえさんは両腕で目を守ろうとしているようにみえた。鳥たちはわしの上を通り過ぎて、南西の方角に飛んでいって、わしはやつらが完全に視界から消えるまで見ていた。んで、わしは今おまえさんを見ているのと同じくらいはつきりと、これを見たんだ。それだけじゃねえ、なあ、この金曜日の夜の夢に気を付けろ。これはなんかあるぜ、おまえさんが生まれたのと同じくらい確かなな。きつとなんかあるぜ、なあ。」

この夢はわたしの好むものではなかったことを白状する。しかし、わたしはそれを、わたしたちが逃亡計画を練るなかでもたらされた漠然とした興奮と動揺に帰すことによつて、それに関する心配を振り払つた。ただ、その影響をすぐに払い除けることはできなかつた。それはよくない前兆だと感じた。サンディは珍しく

断固たる態度で予言者めいていて、その様子はわたしが抱いた印象とおおいに関連していた。

わたしが勧め、仲間たちが同意した逃亡計画は、ハミルトン氏が所有している大きな丸木舟を盗んで、復活祭の休日の前の土曜の夜にチェサピーク湾に出港し、全力で湾の奥部——七十マイルの距離——を目指して漕いでいくというものであった。そこに到着したら、丸木舟を捨てて漂流させ、自由州に着くまで北極星の方向へ歩いていくという行程であった。

この計画にはいくつか難点があった。ひとつは湾の強風からの危険であった。荒天のときには、チェサピーク湾の海面はひどく荒れ、丸木舟では波に飲み込まれる危険がある。もうひとつの難点は、丸木舟がないことがすぐに気づかれてしまうだろうというものであった。すぐに、いなくなっている者たちにそれを盗った疑いがかけられ、セント・マイケルズから出港している速い船の数隻によって追跡されるに違いない。しかもその場合に、もし湾の奥部に到着して丸木舟を漂流させれば、それがわたしたちの進路を教えるものとなって、陸上の追っ手たちを呼び寄せることになるかもしれない。

これらとその他の難点は、そのときに提案しえた他のすべての計画に対して主張することのできるより強力な利点によって傍にどけられた。海上では、わたしたちは主人のために働く漁師だと思見なしでもらえる可能性があった。一方、デラウェアに隣接する地域を通る陸路を行けば、あらゆる妨害や多くの非常に不愉快な質問に遭うことは必至で、それでわたしたちは大変な困難に陥るかもしれない。白人ならだれでも、その気になれば、どこの

道だろうと黒人を呼び止め、尋問し、拘束することが認められているのだ。

このような取り決めによって、数多くの悪事（奴隷所有者たちによってさえそのように見なされる）が起きている。自由黒人が、ごろつきの一団から自由を証明する書類を見せるように命じられるといういくつかの事例が知られている——書類を提示すると、ごろつきたちはそれを破って、この餌食を捕らえ、彼を終わることのない隷属の人生へと売り払ってしまうのである。

出発予定の一週間前、わたしは仲間のひとりひとりに、復活祭の休日の期間中、ボルチモアを訪問する許しを与える外出許可証を書いた。許可証はこのようなものであった。

「ここに、下に署名した人物たる私は、本状を所持する人物である我が従者ジョンに、復活祭の休日を通すためボルチモアに行く正式な自由を与えたことを証す。

W・H

メリーランド州トールボット郡セント・マイケルズ近く」

わたしたちはボルチモアへ行くのではなく、ノース・ポイントの東、以前にフィラデルフィアからの蒸気船が向かうのが見えた方向に上陸するつもりであったが、湾の下部でボルチモアへ舵をとっているあいだは、これらの許可証がわたしたちにとって有用となるかもしれない。だが、他のすべての返事が質問者を納得させるのに失敗するまでは、これらを見せるつもりはなかった。万が一ではあるが、話しかけられた際には、平静で落ち着いた

ていることが重要であると、わたしたちはみな十分に認識しており、そうした試練の時にどう振る舞うべきなのか、お互いを相手に練習を重ねた。

それは長く緩慢な日々と夜々であった。宙吊り状態は極度に苦痛であった。生命と自由がその結果にかかっているような局面で諸々の公算を比較検討するには、揺るがざる度胸が必要である。わたしは行動を欲していて、その終わりに出発することになっていた日の夜明けを迎えたときは嬉しかった。前の晩に眠ることは問題外であった。わたしはこの行動の扇動者であったため、おそらく仲間のだれよりも深く感じるところがあった。この企て全体の責任がわたしの肩にかかっていた。成功の榮譽、そして失敗の恥辱と混乱は、わたしには無関心でいられるようなことではなかった。食料が用意され、衣服が荷造りされ、わたしたちは全員準備ができ、土曜日の朝が待ち遠しかった——それがわたしたちの隷属の最後の朝であると思つて。

その日の朝のわたしの心の混乱と動揺を説明することはできない。奴隸州では、失敗した逃亡者はひどい拷問を受け、遠い南部へと売り払われるだけでなく、しばしば他の奴隸たちからも罵倒されるといふことを、読者はどうか考えてほしい。彼は、他の奴隸たち全員が主人たちから疑われるようにすることに——彼らがより厳しい警戒下に置かれ、彼らの特権に対してより厳しい制限が課せられるようにすることにより——彼らの状況を耐えがたくしたと非難されるのである。わたしはこの方面からの不平不満の声を恐れていた。奴隸の主人にとつても、逃亡する奴隸がその逃走の際に仲間の奴隸のだれからも助けを得ていなかったと信

じるのは困難であった。したがって、ひとりの奴隸が姿を消すと、この企てに關して知っていることについて、その場所のすべての奴隸が問いただされ、ときには、そのような逃亡について彼らが知っていることと疑われることを吐かせるために拷問されることさえある。

北部への出発予定の時間が近づくにつれ、わたしたちの不安はますます強まっていた。それはわたしたちにとつて、生死のかわつた問題であると心から感じられ、万が一最後の手段に訴へかける必要が生じた場合は、逃走するだけでなく、戦う心づもりが完全にできていた。しかし、試練の時はまだ来ていなかった。決心するのは容易であったが、行動するのはそれほど容易ではなかった。わたしは、最後の段階になつて尻込みする者が現れると予期していた。そういう者が現れるのは当然なので、決行までの時間中に機会があれば、困難を説明して排し、疑念を取り除き、恐怖を払いのけ、全員の決意を鼓舞した。振り返るにはもう遅すぎ、今は前を向く時間であった。たいていの他の者たちと同じように、わたしたちは自分たちの仕事のうちの話し合いの部分は長い時間をかけてうまくやり終えており、わたしたちは本気であつて、言葉だけでなく行動においても偽りなくあるうとしていた。のように、行動する時が到来していた。もし自分たちが現にそうしたように、行くことを本気で誓約したあとに、この期に及んでその試みをやり損なつたとしたら、それは事実上、自分自身に臆病者の烙印を押していることになり、座つて腕を組んで自分が奴隸にしか適さないことを認める方がましだと彼らに述べることで、わたしは仲間たちの自尊心に訴えかけることを忘れなかった。

そのような卑しむべき性格づけを被ることは、全員が不本意であった。サンデイ（残念なことに彼は脱退した）を除くすべての者が断固とした態度を示した。そして最後の会合では、わたしたちは、決められた時間に自由の地への長い旅に必ずや間違いなく出発することを新たに、心の底から誓った。この会合があったのは、その終わりにわたしたちが出発することになっていた週の半ばであった。

その朝早くに、わたしたちはいつもどおり畑に出たが、不安で心臓は早く鼓動していた。わたしたちと親密な関係にある者であればだれでも、わたしたちが万事順調ではなく、なにかの化け物がわたしたちの考えに取り憑いているのを見てとったかもしれない。その朝のわたしたちの仕事は、過去数日間の仕事と同じ——堆肥を出してきて撒く——であった。この仕事をしている最中、わたしは突然の虫の知らせに襲われた。それは、暗い夜に孤独な旅路を行く者の前方に深淵を、後ろに敵の姿を明らかにする稲妻のように、わたしにひらめいたのだ。わたしはすぐに、近くにいるサンデイ・ジェンキンスの方を向いて、こう言った、「サンデイ、ぼくらは裏切られたぞ。なにかがぼくにそう呟いたんだ」。あたかも警官がそこに見えているかのようには、わたしはそれについて確信を感じていた。サンデイは言った、「なあ、それは奇妙ではあるがな、わしもおまえさんと同じように感じるんだ」。もし母親——亡くなってもう長い——がわたしの前に現れて、わたしたちが裏切られたと話してくれたとしても、わたしがこのとき感じていた、この事実に対する確信をさらに強めることにはならなかったであろう。

その数分後、角笛の長く低く遠い音で、わたしたちは畑から朝食へ召集された。わたしは、人がなんらかの重大な罪のために処刑に連れて行かれる前に感じるだろうと思われるのと同じような感覚を抱いていた。朝食は食べたくなかったが、形だけのために、他の奴隷たちとともに家に向かつて行った。わたしの感情は、逃亡する権利に関しては揺れ動いてはいなかった。その点については、わたしはなんら心痛を感じていなかった。わたしの不安は、失敗によってもたらされる影響を思つてのことであった。

この鮮烈な虫の知らせの三十分後、懸念していた騒ぎが起こった。朝食のために家に着いて、小道の門の方向に目を遣ると、最悪の事態がすぐに知れた。フリーランド氏の家の小道の門は、玄関から半マイル近くのところであり、主要な道の境界に沿って密生している森で深い陰になっていた。しかし、わたしは四名の白人と二名の黒人が近づいてくるのを認めることができた。白人たちは馬に乗り、黒人たちはその後ろを歩いており、縛られているようにみえた。「ぼくたちは完全に終わりだ」とわたしは考えた。「間違ひなく裏切られたんだ」。わたしはこのときには落ち着いていて、もしくは比較的落ち着いていて、結果を平然と待った。この不吉な一団が門に入ってくるのが見えるまで、わたしは彼らを眺めていた。逃走をうまくやり遂げることは不可能であり、わたしは、それがどんなものだろうと、ぐらつくことなしに悪と対峙する決意を固めた。というのも、このときわたしは、状況は当初予期していたこととは違ったものになるかもしれないというかなかな希望を抱いていないわけではなかったからである。数秒後、ウィリアム・ハミルトン氏が馬をたいへんな速度で飛ばして、明

らかに興奮した様子でやってきた。彼は非常にゆっくりと馬に乗る習慣で、馬を疾走させることはめつたになかった。このとき、彼の馬はほぼ全速力で、後ろに土埃を濃く巻き上げていた。ハミルトン氏は、近隣地域全体で最も妥協のない人物のひとりであったが、それにもかかわらず、話し方は顕著に穏やかな人物であった。非常に興奮したときでも、彼の言葉は冷静で慎重であった。彼は玄関までやってきて、フリーランド氏がいるか尋ねた。わたしは、フリーランド氏が納屋にいることを彼に伝えた。この老紳士は納屋に向かって、尋常ならざる速度で馬を走らせていった。料理人のメアリーはいったいどうしたのかわからずに当惑しており、わたしは彼女に理解させることができるという素振りもみせなかった。彼女がだれよりも真つ先に、一家に面倒をもたらしたとわたしを罵る動きに加わるだろうことをわたしは知っていたので、状況がわたしの助けなしに展開するままに任せて黙っていた。数秒後には、ハミルトン氏とフリーランド氏が納屋から家へとやってきたが、彼らが前庭に姿を現したまさにそのときに、三人の男（治安官だとわかった）が、あたかも迅速な仕事を要求する合図で召集されたかのように、馬に乗って小道に走り込んできた。数秒で彼らは前庭に到着し、そこで急いで馬から降りて馬ひもを縛りつけた。これが終わると、彼らは、炊事場から少し離れたところに立っていたフリーランド氏とハミルトン氏に加わった。あたかもこれからどうするのか相談しているかのように数秒が経ち、その後、全員が炊事場の扉まで歩いてきた。このとき炊事場にはわたしとジョン・ハリス以外だれもいなかった。ヘンリーとサンディはまだ納屋にいたのだ。フリーランド氏は炊事場

の扉のなかへ入ってきて、動揺した声でわたしを名前で呼びつけてこちらへ来るように命じた。わたしに会いたがっている数人の紳士がいるとのことだった。わたしが扉のところでは彼らに歩み寄り、なにがお望みか尋ねると、治安官たちはわたしをつかんで、抵抗するなど言った。わたしがまずい状況にいる、あるいはそういう話が出ているということ、わたしを検問できる場所に連れて行くだけだということ、わたしを主人の元に連れ出させるためにセント・マイケルズまで移送するということであった。さらに、わたしに不利な証拠が正しくない場合には釈放されるとも言った。こうしてわたしはきつく縛られ、完全に捕獲者たちの意のままになった。抵抗は無駄であった。彼らの人数は五人で、完全武装していた。わたしを確保すると、次にジョン・ハリスに向き直り、数秒で、わたしをすでに縛ったのと同じくらいいっかりと彼を縛るのに成功した。次に、このときに納屋から戻ってきたヘンリー・ハリスの方を向いた。「手を組め」と治安官たちはヘンリーに言った。「ごめんだね」とヘンリーは非常に断固としたはつきりとした声で、非常に決然とした様子で言ったので、一瞬、事の進行を停止させるほどであった。「手を組まないというのか？」と治安官のトム・グレアムが言った。「ああ、ごめんだね」とヘンリーはさらに語気を強めて言った。ここで、ハミルトン氏、フリーランド氏、それに警官たちがヘンリーのそばにやってきた。二人の治安官が光り輝く拳銃を取り出し、もし手を

9 トマス・グレアムはトマス・オールド家の隣人で、セント・マイケルズ郡の治安官であった。

組まなかつたら撃ち殺すぞと神の名にかけて宣言した。この雇われのならず者たちはどちらも拳銃の撃鉄を引き、明らかに引き金に指をかけ、丸腰の奴隷の胸に彼らの致命的な武器を突きつけると同時に、もし手を組まなかつたら「お前の忌々しい心臓を撃ち抜いてやる」と言ったのだ。

「撃てよ！おれを撃てよ！」とヘンリーは言った。「おまえらが、おれを殺せるのも、一度きりだ。撃てよ！——撃ってみるよ！どうにでもなれだ。縛られるのはごめんだ」。この勇敢な男は、言葉遣いそれ自体と同じくらい大胆不敵な口調で言い放った。そして、こう言った瞬間に、まさにその胸ぐらには銃が突きつけられていたが、彼が素早く両腕を振り上げて、刺客たちの取るに足りない手から銃をはね飛ばしたため、武器は反対の方向に吹っ飛んでいった。ここで取っ組み合いが始まった。ありとあらゆる人手がこの勇敢な男に飛びかかり、しばし彼を殴りつけると、彼を制圧し縛りつけるのに成功した。ヘンリーはわたしを恥じ入らせた。彼は戦った。勇敢に戦ったのだ。ジョンとわたしは抵抗をしなかった。実のところ、だれかを打ち負かす合理的な可能性がなければ、戦うのは無益だとわたしは思っていたのだ。だが、果敢なヘンリーが行った抵抗には、ほとんど神意のごときなにかがあった。この抵抗がなければ、わたしたちは全員、はるばる南部へと送られていたであろう。ヘンリーとの争いの直前に、ハミルトン氏はこう穏やかに言った——そしてそれは我々の逮捕の原因について、はっきり示唆してくれたのだが——「おそらく、フレデリックが自分と他の者たちにために書いたはずのあの通行証を探した方がいいぞ」。もしそうした許可証が見つかったとし

たら、わたしたちにとって、そのものずばりの不利な証拠となっていたであろうし、わたしたちを裏切った者の申し立てをすべて立証することになっていたのである。ヘンリーの抵抗のおかげで、乱闘によって引き起こされた興奮がそちらの方向にすべての関心を引き寄せてくれたので、わたしは見られることなく許可証を火に投げ入れることができた。乱闘にともなう混乱、そしてさらなる問題が生じる懸念のために、捕獲者たちはおそらく、フレデリックが仲間たちのために書いたと言われる「あの通行証」の搜索をさしあたり見合わせることになり、そのため、逃亡するという目的に関してはわたしたちの罪はまだ証明されていなかった。そして、わたしたちがそのような目的をもっていたかについては、全員が多少の疑念を抱いていたのは明らかであった。

わたしたちが全員完全に縛られ、セント・マイケルズへ、そしてそこから留置所へと出発しようとしていたときに、ベッツィ・フリーランド夫人（ウィリアムの母であり、ヘンリーとジョンに對しては、彼らが彼女の家で幼年時代から育てられてきたため、非常に強い愛情を——南部なりのやり方で——かけていた）が、両手に小型パンをいっぱい持って、台所の扉までやってきて——その朝、わたしたちは朝食をとる時間がなかったのだ——ヘンリーとジョンにパンを分け与えた¹⁰。それが終わると、この御

10 エリザベス・フリーランドはトールボット郡の名家であったハンブルトン家の出身で、結婚したウィリアム・フリーランド（ダグラスを借り入れている同名の人物の父）とは一八一〇〜二〇年のあいだに死別していた。一八三〇年の国勢調査では、彼女を世帯主とする世帯には、二名の白人男性（うち一名は息子ウィリアム）と四名の奴隷がいたと記録されている。

婦人はわたしを見ながら、その骨ばった指でわたしを指差して、次のような別れの言葉を述べた。「この悪魔め！この黄褐色の悪魔め！逃亡なんてことをヘンリーとジョンの頭に植え付けたのはおまえだ。おまえが、足長の黄褐色の悪魔のおまえがいなければ、ヘンリーとジョンは逃亡なんて絶対に考えやしなかったはずさ」。わたしが御婦人に一瞥を投げかけると、彼女は怒りと恐怖の入り混じった叫び声を上げながら、台所の扉をボタンと閉めて中に入り、彼女自身のかすれ声と同じくらい荒っぽい連中の手に、わたしと他の者たちを委ねて去っていった。

もしこの朝に、親切な読者が馬車で幹線道をイーストンへと、もしくはそこから静かに移動していたとしたら、彼の目は痛ましい光景に遭遇していたであろう。隷属の人生よりも自由を好むという以外になんの罪も犯していない五名の若者が——ひとまとめにきつく縛りつけられ——拳銃と短剣で完全武装した乗り手を載せた三頭の力強い馬にくくりつけられ——公共の本街道上の留置所までの道のりを重罪人のように引き回され、そこらに集結して無慈悲にも自らの過ちをあらゆる種類のみだらな行為や遊興の機会へと変える怠惰で野卑な人々の群衆から、ありとあらゆる愚弄を浴びるのを読者は目撃していたであろう。わたしはこうした下劣な人々の群衆を眺め、自分自身と友人たちがこのように攻撃され迫害されるのを見るにつけ、サンディの夢が実現したと思わずにはいられなかった。わたしは人を食い物にする道徳的なハゲワシたちの手のなかにあり、その鋭い鉤爪に捕えられていて、わたしたちが通り過ぎるほどの近隣においても、同種の羽をもった新たな鳥たちの嘲りのなか、イーストンに向かって南東の方向に急か

されていた。わたしたちが会うすべての人が逮捕の原因を知っていて、その悪意ある眼差しをわたしたちの受けた災いを見ることで満足させ、わたしたちの破滅を眺めて満悦するために、外に出たわたしたちが通り過ぎるのを待ち構えているかのようにわたしには思えた（そしてこのことは、奴隷所有者たちとその仲間たちがよく分かっていて示している）。わたしを縛り首にすべきと言う者がいれば、わたしを焼き殺すべきと言う者もいた。わたしの背中から「獣皮」をひん剥いてやるべきと言う者もいた。他方で、貧しい奴隷たち以外には、わたしたちに優しい言葉や同情の眼差しを投げかけてくれる者はひとりとしていなかった。奴隷たちは重い鋏を持ち上げて、その後ろで彼らが働いていた支柱に横木を通した柵越しに、注意してわたしたちをちらちらと見ていた。その朝のわたしたちの苦難は、言葉で説明するよりも想像によって容易に思い描くことができる。わたしたちの希望は一撃ですべて打ち砕かれた。残酷なまでの不正、勝ち誇る犯罪、無罪であることの無益さを思うと、わたしは自身の無知と弱さのなかで自問せずにはいられなかった——「正義と慈悲の神はいまどこにいるのか？そして、どうしてこれらの邪悪な者たちが、このようにわたしたちの権利を踏みじり、わたしたちの感情を愚弄する力をもつのだろうか？」しかし、次の瞬間には、「抑圧された者の報われるときが最後にやってくる」という慰めの考えが思い浮かんだ¹¹。ひとつのことについては喜ぶことができた——わたしがこの大災難をもたらしてしまった親愛なる友人

11 箴言28:16-18に大まかに基づく。

たちのうち、そこに導いたことについて、言葉や眼差しによってわたしを非難する者はひとりもいなかったのだ。わたしたちは兄弟同然の一団であり、このときほどお互いにとってかけがえのない存在であったことはなかった。わたしたちにとって最大の痛みは、わたしたちがはるばる南部へと売り払われる見込みは高かったが、その場合におそらく起こるであろう別離を思うことでもたらされた。治安官たちが前方を見ているときに、一緒に縛り付けられていたヘンリーとわたしは、わたしたちを管理する人さらいたちに見られることなく、ときどき言葉を交わすことができた。

「外出許可証をどうしたらいい？」とヘンリーが言った。「パンと一緒に食べる」とわたしは言った、「破くのは無理だ」。わたしたちはこのときセント・マイケルズの近くだった。許可証についての指示は伝達され、実行された。「なにも認めるな」とわたしは言った。「なにも認めるな！」は伝達され命じられ、同意された。お互いに対するわたしたちの信頼は揺るがなかった。成功だろうと失敗だろうと運命を共にする覚悟が完全にできていた——災難がわたしたちに降りかかったあとでも、わたしたちの覚悟はその前と同様に揺るがなかった。

セント・マイケルズに到着すると、わたしたちは我が主人の家で一種の尋問を受けた。彼らがわたしたちを逮捕する際に根拠としていた証拠が本当なのかについて主人トマスが疑っていること、そして彼がわたしたちの罪を主張する際に、ある程度は確信しているふりをしているに過ぎないことはわたしの目に明らかであった。仲間たちはだれもなにも言わず、このことはわたしたちの言い分にとって、なんらかの点で不利に働きたが、きつとわ

たしたちの家に戻れるだろうという望みはあった——戻っても他に目的はないが、少なくとも、わたしたちを裏切った罪の男あるいは女を見つけ出すために。

この目的のために、わたしたちはみな、逃亡を企図していたことを否認した。主人トマスは、わたしたちの逃亡の意図について彼がもっている証拠は、殺人事件の際に絞首刑に処するのに十分なほど強固であると言った。「でも」とわたしは言った、「その二つの事件は同等ではありません。もし殺人が犯されたのであれば、だれかがそれをやったにちがいません——それは実行されたのです！ぼくらの事件では、なにも実行されていません！ぼくらは逃亡していません。ぼくらに対する証拠はどこにあるのでしょうか？ぼくらは静かに仕事をしていました」。自分たちに対する証拠を引き出すために、わたしはこのように普段以上に自由に話した。わたしたちはみな、罵倒を浴びせかけられる具体的ななにかを得られるように、裏切りの罪を犯した恥知らずをなによりも知りたかったのだ。話が進むなかで明らかになった端々の情報から、わたしたちに対する証人はどうやらひとりしかいないようであり——その証人を場に出すことはできないようであった。主人トマスはだれが密告者なのかは言おうとしなかったが、わたしたちは疑念を抱いており、ひとりの人物だけを疑った。いくつかの状況から、サンデイが裏切り者であること示しているように思えた。計画全体についての彼の知識——計画への参加——わたしたち仲間からの撤退——彼の夢、そしてそれと同時のわたしたちが裏切られたという虫の知らせ——わたしたちが逮捕され、彼は残ったこと——は疑いを彼に向けるようにさせるものであった

が、わたしたちは彼を疑うことができなかつた。わたしたちはみな、彼をあまりに愛し過ぎていたため、彼がわたしたちを裏切ることが可能とは考えられなかつたのだ。そのため、わたしたちは罪を別の者たちに転嫁した。

その朝、わたしたちは十五マイルの距離を、馬の後ろに文字どおり引つ張られて行き、イーストンの留置場に入れられた。わたしたちは行程の目的地に到着して嬉しかった。その道中は愚弄とはずかしめばかりだったからである。世論の力はあまりに強力なので、この力による中傷の砲火を受けると、無実の者であっても無実であることによる幸福な慰安を感じるのが困難である。まわりの者たちがみな、わたしたちを犯罪者だと糾弾し、わたしたちをそのように扱う力と意向をもっているときに、いかに自分自身を正しいと思うことができるだろうか。

留置所では、わたしたちは郡の保安官であるジョセフ・グレラム氏の管理下に置かれた¹²。ヘンリーとジョン、それにわたしはひとつの部屋に入れられ、ヘンリー・ベイリーとチャールズ・ロバーツは彼らだけで別の部屋に入れられた。このように分けられたのは、打ち合わせという利点をわたしたちから奪い、留置所内でもめぐとを未然に防ぐのを意図したためであった。

閉じ込められてからは、わたしたちを苦しめる新たな一団が襲いかかってきた。(死肉を喰らう機会をうかがうハゲタカのごとく)人間の肉体を買う機会をうかがって、州のすべての郡都に集まってくる人間の姿かたちをした鬼どもの群れ——奴隷商人た

12 ジョセフ・グレラム(一七九七年頃、没年不詳)

ち、奴隷商の代理人たち、奴隷商の手先たち——が、わたしたちが売られるために、その主人によって留置所に入れられたのかを確かめるために群がってきた。このように下劣で悪辣な一団をわたしはそれまで見たことがなく、二度と見ないことを望む。わたしは自分が、地獄からやってきたばかりの悪魔の群れによって囲まれていくかのように感じた。彼らはわたしたちを笑い、横目で見て、にやにやしてこう言った、「ああ!こわっばどもめ、おれたちはおまえらを捕まえた、だろ?で、逃亡しようとしてたって?どこに逃げるつもりだったんだ?」。わたしたちを好きなかげあげつて冷やかしたあとに、その価値を見定めるために、彼らは次々とわたしたちを検診した。わたしたちが強壮で健康か確かめるために腕や足を触り、肩をつかんで揺さぶって、厚かましくもこう訊いてきた、「おれたちがおまえらの主人になるのはどうだ?」。こうした質問に対して、わたしたちは返答するのをいさぎよしとせず、完全に口をつぐんでいたため、彼らをひどく苛立たせた。わたし自身は、人間の肉体で一儲けしようとするウイスキー太りの賭博師たちを嫌悪していたし、彼らも同じくらいわたしを嫌悪していたと思う。ひとりの男がわたしにこう言った、「もしおれがおまえを買ったら、すぐにでもおまえを這いつくばらせてやるさ」。

これらの黒人の買い人たちは、上品な南部キリスト教徒の公衆にとつて非常に不快である。立派なメリーランドの社会では、彼らは必要だが忌むべき人物たちだとみなされている。集団としては、彼らは冷酷なごろつきであり、本性と仕事によつてそのようになつてしまつたのだ。彼らの耳には、怒りに震え悲嘆に暮れた

人間の苦悩の叫びは慣れ親しんだものとなつてゐる。彼らの目は人間の困窮を見るべく永遠に開かれてゐる。彼らは冒瀆された愛情、辱められた美德、台無しにされた希望のなかを歩いている。彼らは悪と血に親密になつており、その魂を墮落させ地を汚す仕事の最も放埒な実例を眺めて満悦するのであり、道徳的な害虫である。そうだ、彼らは奴隷制の当然の成果であり、このような集団を可能にしてゐる奴隷所有者たち以上に、彼らが悪党だという主張がなされるのは不可解である。彼らはメリーランドとバージニアで生み出される余剰の奴隷人口の行商人にすぎない——呼吸そのものが冒瀆であり流血であるような粗野で無情で尊大なごろつきどもである。

ときに牢獄に押しかけてくるこうした奴隷買ひ人たちを除けば、わたしたちの獄舎は、わたしたちが権利上期待できる程度以上に、はるかに快適であつた。支給される食料は少なく粗末であつたが、部屋は留置所内で一番であつた——こざっぱりとしていて広く、重い錠とかんぬきや窓の黒い鉄製の格子を除けば、牢獄にゐることをどうしても思い出させるような物はなかつた。わたしたちは、このイーストンの留置所に入れられるほとんどの奴隷とは違つて政治犯であつた。だが、この場所は満足をもたらず場所ではなかつた。かんぬき、閉じ棒、格子窓は、どんな肌の色であろうと自由を愛する者にとっては受け入れがたい。未決状態も苦痛であつた。やつてくる者がわたしたちの運命に一条の光を投げかけてくれることを期待して、階段のあらゆる足音に耳をすませた。ソル・ロウのホテルの給仕のひとりと数語でも言葉を交わせるのであれば、わたしたちはその代価として頭から髪の毛を

刈り取つて与えることもいとわなかつたであらう¹³。そうした給仕たちはテーブルで事態のなりゆきがどうなる見込みか耳にしている可能性があつた。彼らがその白い上着でホテルの前をあちらこちら動き回つてゐるのがわたしたちにも見えたが、どの給仕にも話しかけることはできなかつた。

休日が終わつてまもなく、わたしたちが予期してゐたのとは違つて、ハミルトン氏とフリーランド氏がイーストンにやつてきた。逃亡奴隷に対して通例のように、「ジョージアの商人たち」と取引をするためでも、わたしたちをオースティン・ウォルドフォークに送り込むためでもなく、チャールズとヘンリー・ハリスとヘンリー・ベイリーとジョン・ハリスを牢獄から解放するため、しかも鞭の一振りも加えることなく解放するためであつた。こうして、わたしは牢獄に完全にひとり取り残された。無実の者は連れ去られ、罪人は残された。友人たちはわたしから引き離され、それは永遠の離別のように思われた。こうした状況は、わたしたちの逮捕と収監にまつわる他のどの出来事よりもわたしに苦痛をもたらした。流血した裸の背中への三十九回の鞭打ちでも、彼ら、青春期の友人たちとのこの別れよりは喜んで耐え忍んだであらう。しかし、わたしは自分が正義のようななにかの犠牲者であると感じないではいられなかつた。わたしによつてこの計画に引き込まれたこれらの若者たちが、なぜ煽動者と同等に苦しまなくてはならないのだろうか。彼らが牢獄から、そして米作湿

13 ソロモン・ロウはイーストンで有名な酒場兼宿屋の経営者であつた。その宿屋は奴隷商人の拠点としても知られており、一八一八年からは毎年、奴隷の競売が行われていた。

地での恐ろしい生活の展望から解放されて、わたしは嬉しかった。高貴なヘンリーのために言っておけば、彼は縛られて牢獄に引つ張つてこられるのを嫌がったのとはほぼ同程度に、わたしをそこに残したまま牢獄を離れるのを嫌がっているようにみえた。だが、彼も他の者たちも、売られることになれば、このような場合には十中八九、ばらばらにされてしまふに違いないことはわかってきた。今となつては完全に所有者の手中にいる以上、平穩に家に戻るのが最善だろうとわたしたちはみな結論づけた。

わたしはこの最後の別れにおいてはじめて、奴隷たちがしばしば到達する定めとなつている、あの孤独の深淵の極みに触れた。わたしはこの世で独りぼっちであり、一生続く悲惨の運命に委ねられて、ひとりきりで石の牢獄の壁のなかにあつた。それまで何ヶ月にもわたつて多くを希望し期待してきたが、希望と期待は今ではしぼんで枯れ果ててしまった。ずっと恐れてきたジョージアやルイジアナやアラバマでの奴隷生活——そこから逃亡することとはほぼ不可能である——が、孤独のなかにあるわたしの顔を今では直視していた。惨めな奴隷、所有者の手中にある単なる機械以外の何者かになるという可能性は、今では消え失せてしまい、それは永遠に消え失せてしまったようにわたしには思えた。綿花畑とサトウキビ農園の数限りない恐怖に苛まれた生ける屍の生活が、わたしの運命だと思われた。わたしたちが牢獄に入れられた当初にそこに殺到した悪魔どもが、引き続きわたしを訪問し、質問や思わせぶりの発言をわたしに浴びせかけた。わたしは愚弄されても、なにもできなかつた。正義と自由の要求に対してはひどく鋭敏であつたが、それを主張する手立てがなかつたのだ。こう

した鬼どもに向かつて自由と慈悲について話すことは、熊や虎に對して理を説くのと同じくらい馬鹿げたことであつただろう。鉛の弾丸と鋼鉄だけが、彼らの理解する唯一の議論であつた。

こうした惨めさと絶望の生活を送つて一週間ほど経つたあとに——ついでに言えば、それは一ヶ月に思えた——わたしにとつて非常に驚きであり、またたいへんに安堵をもたらすものでもあつたが、主人トマスが牢獄にやつてきて、わたしを外に出してくれた。彼が言うところでは、わたしをアラバマの彼の友人のところに送り込むためであり、その人物は八年したらわたしを解放してくれるつもりとのことであつた。わたしは牢獄から出られてまず嬉しかったが、示された期間を経たらオールド船長のこの友人がわたしを解放するつもりという話は信じていなかった。また、アラバマに彼の友人がいるということは聞いたことがなく、わたしはこの話を、はるか南部にわたしを送り去るための都合のいい方法としかとらえていなかった。彼らが他の者に奴隷を売るのはあらゆる点で正当だとみなされていたが、あるキリスト教徒が別のキリスト教徒をジョージアの商人に売るといふ考えには多少の醜聞もあつたのだ。アラバマにいるこの友人は、こうした難点に對処するためにでつちあげられたものだとわたしは考えた。主人トマスは、本当のキリスト教徒としての自身のあり方は気にかけていなかったらうとはいへ、キリスト教徒としての評判には非常に気を配っていたからである。しかし、このように述べることで、わたしは主人トマスを不当に扱つてしまつているかもしれない。彼はたしかにこの事例においては、わたしに對して全権力をふるうことなく、わたしの罪の性質からすれば、全体と

しては非常に寛容に振る舞った。彼にはわたしを、まさしくフロリダの低湿地^{エバークレイズ}へと、解放のかすかな望みの彼方へと容赦なく送り込むだけの力と憤慨する理由があつたのであり、彼がそうした力をふるおうとしなかつたことは、彼の名誉のために記しておくてはならない。

セント・マイケルズにとどまって数日経過しても、アラバマからの友人がわたしをそこに連れて行くために姿をあらわすことなく、主人トマスはわたしを、このときには仲直りしていた弟ヒューのところと同居させるべく、ボルチモアに送り返すことを決めた。彼がそのように決意したのは、もしかするとベイサイドでの野外集会で信仰を宣言したためであつたかもしれない。主人トマスはわたしに、ボルチモアに行つて技能をおぼえて欲しいと言つた。そして、もしわたしがきちんと振る舞えば、二十五歳になつたら解放するつもりだと言つたのだ！将来の希望のこの一筋の光に感謝である。この約束にはひとつだけ問題があつた。それはあまりに虫がよすぎる話なので、とても本当だとは思えなかつたのだ。